
恋と理性と幼なじみ

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋と理性と幼なじみ

【Nコード】

N47620

【作者名】

まあ

【あらすじ】

サドで邪悪な召喚獣の番外編です。

清水美春の幼なじみの『清瀬大樹』。

彼は幼い頃から美春を1人の女の子として見てますが彼女の想い人は島田美波と言う女子生徒。

同じ身のFクラスに前田兄弟に巻き込まれながらも彼の想いは彼女

に届くんでしょうか？

自サイト『悠久に舞う桜』でも完結済みです。

オリキャラデータ

キヨセ
清瀬 大樹 ヒロキ

性別 男

所属 2－C

備考…怜生が通っている幼稚園の園長の子供で学園が終わると良く手伝いをしている。清水美春の幼なじみでもあり、昔から彼女に恋愛感情を抱いていて何度もアタックしているが美春は気づく事が無い。たまに美春の父親からバイトを頼まれて美春の家の喫茶店でバイトをしている姿が見られる。

人当たりも良く誰とでも友好的な人間のため、割と顔も広く女生徒からの人気もあり告白もされているが美春が好きだからと断っている。そのため、古い友人からは美春との間を生暖かい目で見守られている。

第1問

「怜生くん、お兄ちゃんがお迎えに着たよ」

大樹は学園が終わり、両親が経営している幼稚園の手伝いをしてい
ると迎えがいつも少し遅い園児の兄がお迎えにくると怜生と呼ばれ
た園児は少しオドオドとしながら兄のもとに歩き出す。

（あれって、うちの生徒だよな？ いままで怜生くんを迎えに着た
ことなかったよな。怜生くんのところはいつもはお母さんだ
ったのに）

大樹がぼんやりと迎えにきた人物を見ると、

「俺の顔に何かついているか？」

「いや、別に」

「なら、そんなおかしい視線を向けるな。俺にそっちの趣味はない」

「奇遇だな。俺にもそんな趣味はないよ。まあ、知り合いにそんな
趣味があるヤツはいるが何が悲しくて同性に……」

大樹の視線に気づいたようで、大樹に冷たい視線を送り怜生の兄が
言う和大樹は苦笑いを浮かべながら否定するが同性愛者に心当たり
があり、ため息を吐く。

「……いるのか？」

「あんたも文月の生徒だろ。なら、話くらい聞いた事あるだろ？」

「……ああ、あの学園はなぜか多いな」

大樹の様子に怜生の兄は眉間に皺を寄せ、大樹は苦笑いを浮かべて同じ学園に通っている幼なじみを思い浮かべながら言うが、怜生の兄は思い出したくないのか眉間に皺を寄せたまま頷く。

「……お兄ちゃん」

「前田理音だ。怜生が世話なってる」

「いやいや、怜生くんは聞き分けも良いし、それより、前田、時間は良いのか？　怜生くんは帰りたいみたいだぞ」

「そうだな。清瀬、じゃあな」

「ああ」

前田兄弟は1度、大樹に向かい頭を下げてから2人で歩き出し、大樹は幼稚園の手伝いに戻る。

これが俺、清瀬大樹と前田理音との出会いだった。この出会いが厄介事に巻き込まれる原因になるとは思ってもよらなかった……

第2問

(……眠いな)

大樹はあくびをしながら、幼なじみの清水美春の家の前に到着し、インターホンを押すが、

(反応がないな?　もしかして、またか?)

中からの反応はなく、大樹は疲れたようなため息を吐いた後、

「おじさん、また、おばさんと美春に逃げられたんですか?」

失礼な事を良いながら、当たり前のように家に上がって行くと、幼い頃の美春の写真を見つめながら、落ち込んでいる男性の姿が目に入る。

(……やっぱりか)

大樹はため息を吐くと、

「おじさん、暗くなってないで、シャキツとする。無気力になるのはダメです」

締め切っているカーテンを開けて言うが、

「……………うん。そうだよね。……美春、美春」

返事をしながらも美春の写真を見て愛娘の名前を連呼している。

(これは、ダメだな)

大樹は1度ため息を吐きと、

「おじさん、俺、学園で美春を説得して見るから……」

「本当かい!!」

「ほ、本当ですから、落ち着いてください。く、首が締まっています」

大樹の言葉に美春の父親は大樹につかみかかり、大樹は苦しそうに言うが、

「頼むよ。美春がいないと私は、私は」

「わ、わかってますから、は、放して、く、苦しい」

大樹の様子など目に入っていないようで、美春の父親はさらに手に力を込める。

第3問

「すみません。清水さんと呼んで欲しいんですけど」

大樹は美春の父親を振り払って登校すると、美春に朝の事の文句の1つでも言ってやろうと彼女の教室である2－Dを訪ねる。

「お姉さま。美春に何かご用ですか♪」

「……なぜ、お前を訪ねる人間が島田限定なんだ？」

「……なんだ。ヒロか」

「おい。舌打ちするな」

美春は頭の中で自分を訪ねてきたのが美波だと決めつけて、大樹に抱きつくが、大樹は疲れたようにツツコミを入れると、美春は大樹の顔を見て舌打ちをする。

「それで、ヒロが何の用？　ちなみにあの変態の話ならお断り」

「お前、自分の父親を……と言うか、俺から言わせて貰えば、お前もおじさんもあまり変わらん」

美春は大樹に向かいここにきた理由を聞くが、そこにはすでに防衛ラインが引かれており、大樹はため息を吐く。

「美春とあんな変態と一緒に……あの家畜野郎、殺す」

「おい。美春、話は終わってない!？」

美春はいきなり物騒な言葉を発すると廊下を全力で駆け出して、彼女の想い人である『島田美波』のいる2－Fの教室に入って行き、大樹はあまりの状況にため息を吐きながらも、

「止めてくるか」

2－Fの教室に向かい歩き出す。

第4問

(……何だ。これ)

大樹が2－Fの教室に着くと美春は背後に真っ黒なオーラを漂わせながら、ぶつぶつと「殺す」とつぶやきながら、吉井明久と言う男子生徒に攻撃をしかけており、明久はなんとか美春の攻撃を交わしている。

「……島田、なんか、いつも、すまん」

「……あはは」

大樹は美春の想い人の島田美波に一先ず、謝ると彼女は苦笑いを浮かべ、

「とりあえず、美春を止めてくれない」

「ああ」

美波は大樹に美春を止めるように頼むと大樹は美春の制服の首をつかみ、

「邪魔したな」

「ヒロ、止めるな。美春はあの豚野郎を殺……」

「殺人は犯罪だ」

「ん？ 清瀬、止めるのか？」

美春の言葉に耳を傾ける事なく教室を出て行こうとした時、昨日出会った前田理音が大樹を呼び止める。

「前田？ さすがに止めないといけないだろ。こいつは単純とか、何と言うか、ほっとくと何をするかわからん。一応はホレた女を人殺しはさせられないだろ」

「ほう……ずいぶんとあっさりと自分の気持ちを暴露するんだな」

「まあ、目の前で言っても気づかないから、問題ない」

大樹は美春に惚れている事をすでに隠す必要などないと言い切る。

「なるほど、なかなか……」

「それで、もう行って良いか。そろそろHRも始まるし、ここにいて鉄人の鉄拳制裁を喰らいたくないしな」

「……殺す。殺す」

理音は何かを企んだように笑っているなか、大樹は相変わらず、ぶつぶつと物騒な言葉呟いている美春を引きずって2－Fの教室を出て行く。

第5問

大樹は休み時間になると、美春とおばさんがまた実家に帰った理由を聞きに21Dの教室を訪れる。

「それで、今回は何だったんだ？」

「いつも通りよ」

「……おじさんもこりないなあ」

大樹は当然のように美春の家庭の事情に首を突っ込んでいると周りからは2人を茶化す声が聞こえるが2人は気にする事なく話を続けて行く。

「まったく、あの変態と言い、あの豚野郎と言い、何で美春の周りにはまともな男がいないのよ」

「お前がまともみたいな言い方だな。お前だって充分に変態だ。百合娘が」

「仕方ないでしょ。お姉さま以外に美春に胸のときめきを与えてくれる女性ひとがいないんだから」

「そりゃ、悪かったな」

美春は周りにおかしな男しかいないからだと言い切り、美波の姿を思い出しているのかうっとりとした表情で言うと、大樹はため息を吐く。

「勝手に盛り上がるのは良いけど、島田の気持ちも考えてやれよ。あいつはお前と違ってノーマルなんだからな」

「そんなものはお姉さまと美春の間には些細な事よ」

「そうですか」

大樹は美春の様子に何を言っても無駄だと判断したようであめ息を吐くと、

「前にも言ったけど、母娘で家出するなら、俺に連絡しろ。俺だって、朝からおじさんに巻き込まれたくないんだから」

「わかってるわよ。ちょっと、メールするの忘れただけでしょ」

大樹は美春にそう言うとう自分の教室に戻り、美春は大樹の言葉に文句がありそうにつぶやく。

第6問

「あのなあ。お前は忘れたの一言で済ませば良いかも知れないけど、俺はおじさんがあの状態だって事をシフト入ってる人に連絡しないといけないうえに今日は強制的に店の手伝いになるんだからな。俺の都合も考えろ」

「別に良いでしょ。ヒロもどうせヒマなんだろうし」

大樹がため息を吐くのを見ても美春は悪びれる事なく言い、

「俺だって、数あるデートのお誘いを断って……」

「ヒロを好きになる物好きなんていないでしょ」

大樹は冗談混じりで言うが、美春はその言葉を一刀両断する。

「だいたい、ヒロがモテるなんて話は美春は1度も聞いた事がありませんから」

（……悪かったな。一応、これでもお前が好きだからって昔から断ってるんだよ）

美春の鈍さに若干、イラっとするが、表情には出さずに、

「そうだな。仮に好きだと言ってくれても、俺の趣味は変わってるからな」

美春を見て苦笑いを浮かべる。

「ちょっと、あんたもあの変態みたいになるんじゃないでしょうね？」

（まあ、ある意味。俺とおじさんは似てるのかベクトルは違うけど）顔をしかめる美春を見て、俺は苦笑いを浮かべつつも、

「大丈夫だ。ああはなりたくない」

「止めてよね。ヒロまであんな変態だったら、それこそ美春の周りにはまともな男がいなくなるじゃない」

おじさんとは同じにならないと言うと美春は何かをぶつぶつとつぶやいている。

「ん？ そろそろ、時間だな。美春、なるべく早く家に帰れよ」

「それは聞けませんわ」

美春の返事に苦笑いを浮かべつつも大樹は自分の教室に戻る。

第7問

(……忙しいな。なんで、おじさんが使えない時に限ってこの店は忙しいんだ?)

大樹は学校が終わると急いで美春の父親が経営している喫茶店の手伝いをしに行くと、店内はお客でこった返しており、休むヒマはない。

「混んでるな」

「そうみたいね」

そんななか、来客を告げるベルが鳴る。

「いらっしやいませ。3名様で……怜生くんと前田か」

「ん。清瀬か。バイトか？」

「まあ、そんなところだ」

お客さんは前田兄弟と女の子が1人であり、理音の言葉に苦笑いを浮かべる。

「ちょっと待ってくれるか。今、テーブル片付けるから」

「ああ」

「……」

3人に少し待ってくれと言い、俺は窓際のテーブルの片付けを始めた時、「コンコン」と窓を叩く音がする。

（ん？ 美春か？ あいつは何がしたいんだ？）

大樹は窓の外には美春が立っており、大樹に言いたい事があるのか、ジェスチャーで何かを伝えようとしている。

（いや、わかんねえよ）

しかし、大樹には美春の言いたい事がわからずに携帯を取り出すと、『今、ここに近寄るな。お前の姿が目に入ったらおじさんが暴走してお客さんが逃げる。キリの良いところで行くから、うちの前で待ってる』

と素早く美春に宛ててメールを出し、

「こちらにどうぞ」

「ああ」

「……」

「メニューが決まりましたら、お及びください」

前田兄弟と女の子に頭を下げると、

「すみません。ちょっとやる事があったんで家に帰ります。10分

くらいで戻ります」

「なるべく早く戻ってきてね」

従業員に頭を下げて美春を待たせている自分の家に向かう。

第7問（後書き）

どうも、作者です。

理音が一緒にきたのは優子です。理音が優子の胸を揉んだ事を謝り、優子と初めての子連れデートの日です。（苦笑）

そんななか、大樹は巻き込まれてバイト。（苦笑）

第8問

「遅い!!」

大樹が自分の家の前まで行くと美春は大樹を怒鳴りつける。

「……お前の家のゴタゴタに巻き込まれてる幼なじみへの配慮はなしか？」

「ヒロ相手にそんなもの必要ありませんわ」

大樹は美春の様子にため息を吐くが美春は大樹を気にかける事はない。

「それで、今回は何のようだ？」

大樹は美春の態度を諦めているようでため息を吐いた後、美春に自分のところに来た用件を聞く。

「今日は美春、ヒロの家に泊まるから、鍵を渡しなさい」

「……悪い。もう1度、言ってくれ」

「ちゃんと聞きなさいよ。美春の話を聞いてなかったヒロのために、仕方ないからもう1度、言ってあげるわ。美春は今日、ヒロの家に泊まるのよ」

美春の突拍子のない言葉に大樹は頭を押さえ聞き返すが、彼女の答えは変わらない。

「良い訳あるか。お前な。いくら幼なじみって言ったって俺は男だぞ。お前が泊まって良い訳あるか。くだらない事を言ってるとお前のメアド、おじさんに転送するぞ」

「ヒロ、そんな事してみなさい。あの変態にヒロが美春に手を出したって泣きつくわよ」

「……親父とお袋が良いと言ったらな」

大樹は美春の考えを改めさせるため、彼女の父親を使って説得を試みるが彼女は自分の父親を使い大樹を脅迫し、大樹は美春の脅迫に両親が反対する事に望みをつなぐが、

「もう許可貰ってるから、鍵♪」

「……親父、お袋」

美春はすでに手を打っていたようで笑顔で手を出し、大樹はため息を吐くと美春に家の鍵を渡した後、店に戻る。

第9問

「ただいま。お袋、飯……あれ？」

「ん？ おかえり。ヒロ」

大樹が美春の家の手伝いを終えて帰宅すると居間には美春しかいない。

「美春、親父とお袋は？」

「なんか、幼稚園の先生方と飲み会になったんだって、帰りは少し遅くなるって」

「今日だったか……って事は今から自分で飯を作らないといけないのかよ」

「そうよ。早く、夕飯作って、美春もお腹が減りましたわ」

「……泊まる気なら、それくらいやっておけよ」

「勝手にキッチンに入るわけには行かないでしょ」

「居間でテレビの真ん前を陣取っているヤツのセリフじゃねえよ……」

美春の言葉に大樹はため息を吐きながらも冷蔵庫の中身を確認すると、

「先に着替えてくる」

「早くしなさいよ」

着替えをするために自分の部屋がある2階に上がって行く。

（……たく、美春のヤツ、泊まる気なら少しはそれらしくしろよな）

大樹は自分の部屋の電気を点けて着替え始めると自分の家を我が物顔で歩いている美春にため息を吐く。

（……あれ？ あいつはまったく）

脱いだシャツをベッドの上に置こうとするとベッドの上には1泊程度の荷物では足りない美春の荷物が置いてあり、

（もういい加減、窓から出入りするなよ）

電気は消えているが窓の鍵が開きっぱなしであろう美春の部屋を見てため息を吐く。

第10問

「……」

大樹は着替えを終えると冷蔵庫を覗き込み。

「……スパゲティとチャーハン。どっちが良い？」

「チャーハンにはラーメンをつけなさいよ」

材料と自分の腹の虫を天秤にかけ、簡単なもので済ませようとし、美春に確認すると彼女はしっかりと食うつもりである。

「……インスタントしかないぞ」

「このさい、ワガママは言わないのです」

「……いや、充分、ワガママだろ」

美春の言葉に大樹はため息を吐くと、

「始めるか」

美春の様子に呆れながらもインスタントラーメンに野菜をのせるなどしっかりとした夕飯を作る。

「いただきます」

「ああ」

大樹が作った夕飯美春と一緒に食べ始める。

「うーん。やっぱり、ヒロのご飯は美味しいです」

「師匠はおじさんだけだな」

「……そこが問題なのよね」

美春は大樹の料理を口に運びながら言うが、大樹の言葉で思い出したくないものを思い出したようで表情を陰しくする。

「そこまで、イヤか？」

「イヤに決まってるでしょ!!」

大樹は美春の様子にこのやりとりはいつもの事だと思いながら美春に父親の事を言うと、彼女はまるで自分の父親を汚物と同じように言う。

「……まあ、かなり、過保護だけど悪い人じゃないだろ」

「過保護なんでもものじゃないわよ。あれはただの変態。ことある事に美春にくつついてくるのよ。うっとうしいうえに気持ち悪い!!」

「まあ、かまわれないよりは多少……悪かった」

大樹は苦笑いを浮かべながら、美春を家に帰そうと説得を試みるが、途中で挫折する。

「ヒロだって、美春と同じ考えじゃない」

「……それでも、俺は少し羨ましいぞ。うちは基本的にガキの頃から放任だからな」

「そうかな？」

大樹は美春の勝ち誇った様子にため息を吐きながら言うと、美春は大樹の言葉を信じられないためか首を傾げる。

「飯、食ったら帰れよ。店はおじさん動かないと回らないんだからな」

「イヤ。しばらくはここに泊まる」

大樹は美春の説得が続けるが彼女が聞き入れるつもりはない。

第11問

「あのなあ。さっきも言ったけど、俺は男なんだぞ。万が一って事もあるだろ」

「美春とヒロじゃありませんわ」

大樹はため息を吐きながら言うが、美春は完全に大樹を同じ年の異性とは見ていなく、安心しきっている。

（まあ、わかってるんだけど……ムカつくよな。でも、さすがに襲えないからな。他は認めたくないが、美春とおじさんのように好きなものにあそこまで突っ込んでいけ……ないな。あれは変態の領域だ）

大樹は美春の答えに苦笑いを浮かべた後、

「ごちそうさま。美春、俺は風呂の準備してくるから、後片付けくらいはしろよ」

「えー、面倒くさい。ヒロがやってよ」

立ち上がり、美春に向かい言うが、彼女は面倒くさいと言う。

「良し。やっぱり、おじさん呼びに行こう」

「ちょっと、待ちなさい!？」 わかったわ。それくらいはやりませう」

大樹はそう言い玄関に向かい歩き出すと、美春は慌てて、大樹を呼

び止める。

「冗談だ。風呂の準備の前に飲み物が欲しいから、コンビニに行ってくる。なんかいるか？」

「じゃあ、バニラのアイスとなんか適当にデザート」

「まだ、食う気か？」

大樹は美春からの注文に顔を少し歪めるが、

「お風呂あがりにはアイスに決まってるでしょ。デザートは別バラ」

美春は女の子特有のデザートは別バラという言葉を持ち出し、

「わかった。わかった。留守番よろしくな」

「いってらっしゃい」

大樹は近くのコンビニまで歩いて行く。

第12問

(……やっぱり、炭酸だな。後は、とりあえず、親父とお袋にはス
ポーツドリンクを買って、アイスはカップよりソフトクリームか?)

大樹はコンビニに着き、買い物をしていると、

「あれ? 清瀬、何してるの?」

「ん? 島田か、見ての通り、何か甘いものが欲しくてな。そっちは?」

「ウチも似たようなもんよ。葉月とアイス食べたいねって話になってね」

小さな女の子と手をつないだ美波が大樹を見つけて声をかけてくる。

「葉月ちゃん?」

「はいです。お兄さんのお名前は?」

「清瀬 大樹だよ。よろしくね」

「こちらこそ。よろしくお願いしますです♪」

大樹は美波から出た葉月と言う名前が美波と手をつないだ女の子だ
と思い、女の子を葉月と呼び、2人は挨拶を交わす。

「清瀬、あんた……」

「島田、変な誤解はするなよ。俺は両親が幼稚園の先生で、たまに手伝ってるから、子供の相手になれてるだけだ」

葉月と仲良さげに挨拶をする大樹の様子に美波は大樹を『ロ』だと思ったのか、葉月とともに大樹から距離をとると、大樹は疲れたようにため息を吐く。

「そ、そうよね。あんたはまともよね？」

「どこから、どこまでをまともと言うかわからないけど、少なくとも小学生には欲情しないな」

「信じて良いのよね？」

「……ああ。と言うか身に覚えのない事で疑われたくない」

美波からのいわれのない疑いに大樹は疲れたようなため息を吐くと、

「それもそうよね。ごめんね。あの学園、おかしい人が多いから」

「ああ、いつもすまん」

美波は謝るが、その言葉を聞いて大樹は逆に美波に謝る。

第13問

「島田、お前んちは近いのか？」

「えっ！？ どうして？」

美波より先に会計を終わらせ、彼女が会計を終わらせコンビニを出る頃を見計らって大樹は声をかけると彼女は意味がわからないように首を傾げる。

「結構、遅い時間だしな。さすがに、女の子2人をそのまま返すのもな」

「気を使ってくれたんだ。ありがとう」

「お兄さん、ありがとうございますです」

大樹は当たり前のように言うと、美波は普段、自分の周囲からされている評価と違い、女の子として自分を扱ってくれる大樹を見て微笑むと、

「大丈夫よ。うちの家はすぐそこだし」

「そうだな。普通、コンビニにくるなら、1番近いところだよな」

送る必要はないと断り、大樹は納得する。

「そうそう。でも、嬉しかったわよ。Fクラスは瑞希ばかり、女の子扱いして、うちの扱い悪いし」

「そんな事はないだろ。お前を女の子扱いしてなかったら、吉井はあんな目にあってない」

「確かにね」

美波はクラスからの扱いが不満なようで少し頬を膨らませるが、大樹の言葉を聞いて笑顔を見せると、

「それじゃあ、うちと葉月は帰るわ。清瀬、また、学校でね」

「お兄さん、さよならです」

「ああ……ん？ 島田、走れ」

美波と葉月が大樹に別れを告げ、大樹が何かを感じたようで美波に指示を出すのが、

「え？ 何かあつ……み、美春！？」

「お姉さま♪」

美波は意味がわからずに首を傾げた時、美春が勢い良く美波に飛びついてくる。

「ちょっと、美春！？ あんた、どこから現れるのよ？」

「美春とお姉さまにはささいな事ですわ♪」

「ちょっと、放しなさい！？」

美波は美春を引き離そうとするが、美春は放れなく、

「お兄さん、お姉ちゃんとあのお姉ちゃんは何をしているんですか？」

「……いや、葉月ちゃんは知らなくて良い世界だから」

葉月の質問に大樹は疲れたようなため息を吐くと、

「……美春、帰るぞ。島田、最後になんかすまん。アイスは大丈夫か？」

「こら、ヒロ、放しなさい。美春はお姉さまと一緒に行くのです」

「え、ええ。大丈夫みたい。清瀬、悪いけど……」

「ああ、責任を持って連れて帰るから、早く行ってくれ。抑えきれなくなる」

「う、うん。わかったわ。葉月、行くわよ」

「はいです」

美波は美春から発せられるものに慌てて葉月を連れて帰る。

「オネエサマ、ドコニイクノデスカ？ オネエサマトミハルノジャマヲスルナラ、ヒロデモコロス、コロス、コロス」

美春は何か人とは違うものに変わり始めているが、

「さっさと帰るぞ」

大樹はなれているようで彼女の変化を気にする事なく、彼女を引きずって歩き出す。

第13問（後書き）

どうも、作者です。

美春の殺意不感症の属性を持つ大樹。（爆笑）

馴れっつのは恐ろしいです。

第14問

「コロ……ス、コ……ロス」

「……いい加減、目を覚ませ。一般人を威嚇するな」

すでに人ではない美春の様子に大樹はため息を吐くと彼女の額に強力なデコピンを放ち、

「はっ!？ ヒロ、お姉さまはどこに？」

「……目を覚まして島田かよ」

美春はデコピンで正気に戻るが彼女はまだ美波を探しており、大樹はもう1度、ため息を吐くと、

「島田なら、帰ったぞ。俺達もアイスが溶けないうちに帰るぞ」

「……ヒロ、美春を差し置いてお姉さまに何をしたの」

「……何もしてねえよ」

美春は大樹と美波の仲を疑っているのか大樹を睨みつけるが、大樹はもう三度、ため息を吐く。

「島田は美人だと思うけど、俺のタイプじゃないしな」

「ヒロはお姉さまに魅力がないと言う気？」

大樹は美波に興味がないと言うと美春は美波の魅力がないと言ったととらえて、大樹を睨みつける。

「いや、睨む理由がわからん。それより、行くぞ。あんまり、この辺をうろつくとおじさんに見つかるぞ」

「それは……」

「いやだろ」

大樹はここで騒いでいると美春の父親に見つかると言うと美春の表情は固まり、大樹が聞き返すと彼女は大きく頷き、

「ヒロ、速く帰るよ」

「……だから、俺は最初から言ってるだろ」

美春は大樹の腕を引っ張り歩き出し、大樹は苦笑いを浮かべ、2人で大樹の家に向かい歩き出す。

第15問

「ヒロ、お風呂、良いよ」

「ん？ ああ」

美春は大樹より先にお風呂に入ったようで自分の部屋から持ち込んだパジャマに着替えて居間に戻ってくると、ソファ―に腰掛けてコンビニで買ってきた雑誌を見ている大樹の隣に座る。

「何、見てるのよ？」

「ん？ 映画雑誌、最近、観てないから、面白いのやってないかな？ と思っさ」

美春は無防備に大樹が読んでいる雑誌を覗き込むと大樹は風呂上がりの美春に少し顔を赤くして、彼女から視線を逸らして言う。

「どれどれ。あっ！？ これ、面白いって」

「アクションか？ まあ、嫌いじゃないな……って、土曜日までか？ どうするかな？」

大樹は美春が指差した映画の上映予定を見て、首を傾げる。

「都合悪いの？」

「今月は少しキツイんだよな。お前が帰らないとおじさんが動けないからバイト料も怪しいし、最悪、土曜日も店の手伝いだ」

大樹は軽く美春を非難するように言うと、

「美春は帰らないわよ。あんな変態のところに1人で帰るなんて危険すぎるもの」

「そういえば、おばさんはどうしたんだ？」

美春の答えに大樹は何かが引っかかる。

「お母さんはせっかくだし、友達と旅行に行くって、美春は学校があるから、ヒロの家に泊まりなさいって」

「……それ、明らかに計画的だろ」

美春の母親の居場所を聞いて大樹がため息を吐いた時、大樹の携帯が鳴る。

「……あの人は」

大樹は携帯を開くとメール受信の表示と送信者の名前を見てため息を吐き、受信フォルダを開き、

『せっかく、2人つきりにしてあげたんだから、上手く犯りなさいよ♪ ヒロくんの未来のお義母さんより』

美春の母親からのメールを見て、大樹はもう1度、ため息を吐くと、

「風呂に行ってくるから、頭、ちゃんと拭いとけよ」

「わかってるわよ」

美春の首にかかっているバスタオルを彼女の頭にのせて、少し乱暴に美春の頭を拭いて居間を出て行く。

第16問

大樹は風呂につかりながら、美春の母親の携帯に電話をかけ、

「……おばさん、いい加減にしてくださいませんか？」

「いい加減ってなんの事？」

美春の母親に文句を言うが彼女はとぼける。

「男に自分の娘を犯せって言う母親がどこの世界にいますか？」

「んー、ここ♪」

大樹はため息を吐きながら美春の母親の行動を戒めようとするが、彼女に反省する気はなく、

「良いでしょ。ヒロくんが美春の事を好きって言うのはうちの旦那と当の本人以外は気づいてるんだから、それに美春はヒロくんだけには心許してるでしょ。それはヒロくんがああ娘にとって特別だからよ」

大樹を煽るように言うが、

「そんな気はしないですよ。あいつに取って俺は異性じゃなく兄貴とか家族みたいなもんなんですから」

大樹は簡単に煽られはしない。

「ヒロくん、面白くないよ」

「面白いの一言で俺の気持ちを踏みにじらないでくれますか？」

「いやいや、そんなつもりはないって」

大樹はため息を吐きながら、美春の母親に向かい言うが彼女の言葉は嘘臭い。

「おばさん」

「ねえ。ヒロくん、わたしは本当に美春とヒロくんが結婚してこないかな？　って思ってるのよ。あの娘はうちの旦那に似て、盲目的だし、ヒロくんみたいにあの娘をちゃんと見ていてくれる人が良いなあ。って」

「近場で間に合わせようとしてますよね？」

「そりゃあ、うちの旦那を見ても引かないのはヒロくんだけだし」

「……もう、良いです」

大樹は美春の母親と話をするのが疲れたようでそう言う返事も聞かずに携帯電話の電源を落とす。

第17問

「……ふう」

大樹は風呂からあがると濡れた頭を拭きながら、コンビニで買ってきたスポーツドリンクに口をつける。

「ヒロ、おじさん達から、さっき電話があって、朝まで飲むから戸締まりはしっかりとしなさい。って」

「ああ」

美春はテレビを見ながら大樹の両親から電話を受けたようで何も気にする事なく、大樹に言うの大樹は表情を変える事なく頷くが、

（……親父とお袋もあっち側か）

この状況があからさまに用意されてる事に全てを悟ったようでため息を吐く。

「……俺は部屋に戻るから、飽きたら寝ろよ」

「言われなくてもわかってるよ」

大樹はスポーツドリンクを手に自分の部屋に戻ると、

「どうした？　大樹？」

「……親父、あんたもおばさんにのせられな」

父親に電話をかける。

「別にのせられてるつもりはないが避妊は」

「親父!!」

大樹の父親も美春の母親と同じく大樹と美春を無理やりくっつけようとしているのか楽しそうに笑い、大樹は声をあげる。

「冗談だ。お前は私達が無理やりお膳立てしなくても自分でやる時はやるって信じてる」

「当たり前だ。何が悲しくて親父達の手のひらで踊らないといけない。だいたい、俺は無理やりよりはあの鈍感が気づかないままって言うのが許せないからな」

「まあ、頑張れ。バカ息子」

大樹は余計な事をするなと言うと父親は優しい声で言う。

「黙れ。くそ親父」

「お前があいつを倒せるように応援してるぞ」

「まあ、その時がきたらな」

大樹はその時がきたら美春の父親と戦う気構えがあるようでため息を吐きながら言う。電話を切る。

第18問

「……ったく」

大樹は携帯の電源を切ると机に向かい明日までが提出期限の数学のプリントを開くとコンポにヘッドホンをつなぎ、音楽を聞きながらプリントを進めていく。

「コンコン」

(……)

「ねえ。ヒロ、まだ起きてる？」

しばらく、大樹がプリントをしていると美春がドアをノックするが、大樹はヘッドホンをしているため、ノックに気づく事はなく、美春が部屋を開ける。

「ちょっと、どうして無視するのよ」

「……無視も何も無いだろ。俺はそれをつけてたんだぞ」

美春は返事のない大樹に文句ありそうにヘッドホンを取り外すと大樹はため息を吐き、

「それで、何かようか？ 課題があるなら居間でしてろよ」

「違うわよ。ここに美春の布団を運ぶの手伝いなさい」

「……はあ？ お前の布団は客間に敷いただろ」

「ダメよ。客間は鍵が付いてないもの。あの変態が襲ってこないとは限りませんわ」

美春の言葉に大樹は頭を押さえてため息を吐くが、美春はどこまで父親を警戒しているのか、鍵の付いている大樹の部屋で寝ようとする。

「……お前な。常識で考えろよ。幼なじみと言っても仮にも男の部屋だぞ。俺がお前を襲わないって保証はないんだぞ」

「ヒロはそんな事しない」

大樹はもう1度、ため息を吐くが、美春はどうしてそこまで大樹を信用しているかわからないが、大樹が自分を襲う事はないと言い切る。

（……信用されているのはわかるが、複雑だな）

大樹は三度、ため息を吐くと、

「……変な事するなよ」

「変な事？」

「お前が俺を襲うとか？」

「美春はお姉さま一筋ですわ」

美春の言葉に従い、客間から布団を一式運んでくる。

第19問

(……結局、眠れなかった)

大樹はさすがに美春が隣にいたため、いろいろと考えてしまい眠れなかったようであくびをしながら居間におりると、両親から「2人で出かけてきます」と言うメモ紙を見つける。

(……出かけてるのか？ 朝から早いな)

大樹はそのメモを見てもう1度、あくびをすると冷蔵庫から卵やハムを取り出し、2人分の簡単な朝食を作り始める。

「……おはよう。ヒロ、朝ご飯は？」

「……お前には遠慮と言う言葉はないのか？」

朝食を作り始めて、しばらくすると美春が休日のはずなのになぜか制服に着替えて居間におりてくるのを見て、大樹はため息を吐くが、

「そんな事を言いながらも、ヒロは美春の分もキッチンと朝ご飯作ってるじゃない」

美春は長年、そばにいる大樹の優しさに甘えている。

「……作ないと、お前は後からうるさいからな。それより、お前は何で制服を着てるんだ？」

「決まってるでしょ。お姉さまに会いに学園に行くからよ」

「……また、島田関連か」

大樹は美春が制服を着ている理由を聞き、ため息を吐くと、

「何度も言ってるけどな。島田はお前ら変態父娘と違ってノーマルなんだ。一般人を巻き込むな」

美春に向かい言うが、

「ヒロ、何を言ってるのよ。美春とお姉さまは『愛し合っているのよ』」

「俺には嫌がっているようにしか見えない。お前がおじさんから逃げ回るように島田はお前から逃げてるよ」

美春さ美波との間には『愛』があると言い切り、大樹は美春の様子にため息を吐く。

「ヒロ、美春をあんな変態と同じように扱うのは許せませんわ」

「なら、お前も島田の話をキチンと聞け。一方的に気持ちをぶつけるのは『愛』とは言わない」

美春は大樹に父親と同列に扱われた事に不満なようで大樹を睨みつけるが、大樹はなれているのか、コーヒーに口をつける。

「一方的なんかじゃありませんわ。美春とお姉さまには……」

「何もないだろ。正直、幼なじみだからと言って、毎回、お前の面

倒事に巻き込まれる俺の身にもなれ」

美春はそれでも大樹に反論しようとするが、大樹は今のうっぶんもたまってのせいか思っている事を口にする。

「幼なじみだから、当たり前のようにお前の相手をしないといけない。そんなわけないだろ。放課後に俺にだって予定もあれば帰ってきてからだってやる事もある。それを幼なじみの一言で全部、つぶされるんだ。巻き込むのは簡単だけだな。巻き込まれる側はたまつたもんじゃねえよ。島田だって同じだ。本気であいつを好きだと言うなら、あいつの言い分も聞け。それができないとそのうち、愛想を尽かされるぞ」

「うるさい!! ヒロにそんな事を言われる筋合いはありませんわ」

大樹の言葉を聞いて、美春は頭に血が上ったようで『大樹に関係ない』と言い、家を出て行き、

「……言い過ぎたか? まあ、どうせ、すぐに忘れるな」

大樹は美春の背中を見送った後、後片付けを始める。

第20問

「前田、今日は怜生くんはどうしてるの？」

「ん。いろいろあってな。学園長もといくそばあが預かってくれる」

「ばばあ長がか？ あのはばあ、また何か企んでるんじゃないのか？」

補習が始まる前に美波が怜生は1人で留守番をしているのかと理音に聞くと理音は怜生を学園長に預けてきたと言い、雄二は怪訝そうな表情をする。

「まあ、大丈夫だろ」

「お姉さま、おはようございます♪」

「み、美春!？」

理音が表情を変える事なく、言った時、教室のドアが勢い良く開き、美春が美波に抱きつく。

「また着たのか。倒錯娘その1」

「誰が倒錯娘その1ですか？ 豚野郎が美春に声をかけないでください!！」

「ちょっと、美春!？ 離れて!! 前田も坂本も見えないで助け

てよ」

理音は美春の登場に眉1つ動かさずに言う。美春は美波に抱きついたら、理音を『豚野郎』と言い切り、美波は理音と雄二に助けを求めるが、

「悪いな。島田、清水を引き離せるのはあいつ……えーと、名前は何だった？」

「清瀬だ」

「そうそう。清瀬しかいないだろ。俺と理音は巻き込まれるのはごめんだ」

理音と雄二は美春は自分達の管轄ではないと言う。

「それなら、清瀬を呼んでよ!!」

「ムリだろ。あいつは休みだ。理音、連絡先知ってるか？」

「ああ、怜生の預かり先を探すのに協力して貰ってるから、携帯の番号は知ってる」

「なら、すぐに連絡して!!」

美波は美春から逃れたいため、理音に向かい言う。理音は携帯電話を取り出し、大樹に電話をかける。

「……どうした？」

「お前の幼なじみが迷惑をかけてるから、迎えにきてくれ」

「……知らん。俺は美春の保護者じゃない」

大樹は理音の要請を冷たく断るとすぐに電話を切り、

「どうだった？」

「知らんと切られた。清水、お前、清瀬に愛想を尽かされたんじゃないか？」

「……あれ？ 美春？」

雄二は理音に大樹がくるかと尋ねると理音は思った事を口に出すと美春の腕が美波から外れ、美春は何かを思ったのか教室を出て行く。

「ケンカでもしたのかな？」

「知らん」

美波は美春のいつもと違う反応に心配そうな表情で言うが、理音は一言で話を終わらせる。

第20問（後書き）

どうも、作者です。

大樹の言葉が思いのほか効いていた美春。
彼女は何を思っているだろうか？

次はいよいよあの方の人外化です。（爆笑）

どうなるでしょう？（悪笑）

第21問

(……ったく、わかっていたけど、島田達に迷惑をかけてるな)

大樹は理音からの電話を切った後、ため息を吐くと、自分の部屋に戻り、制服に着替えて家を出る。

(……あれ？ おじさん、どこに行く気だ？ ……なぜだろう。嫌な予感しかない)

大樹は家を出ると直ぐに美春の父親が店をほったらかしてどこかに行こうとしているのを一抹の不安を感じながら、

「おはようございます。おじさん、朝から何をしてるんですか？ 店の準備はしなくても良いんですか？」

ひとまず、様子をうかがうために美春の父親に声をかけると、

「ヒロクン、ミハルヲミナカタカイ？ ドコニモイナインダ。アノコニナニカアツタラ、ワタシハワタシハ」

(……)

美春の父親の背後からは何かまがましいものが溢れ出ており、大樹はため息を吐く。

「美春が心配なのはわかりますけど、店はどうするつもりですか？ 定休日にするわけにも……」

「……ダメレ。ワタシノジヤマヲスルナラコロス。ワタシハイトシノマイドーターヲサガシニイク」

大樹は無理だとわかりながらも念のため、美春の父親を説得しようとするが、彼のまがましいものは大樹にも向けられる。

「探しに行くってどこに行くつもりですか？」

「ガクエンホウメンニミハルノニオイガスル」

「匂い？ って、今日は休日ですよ。勉強が好きでもないあいつが行くわけ無いじゃないですか？」

「マチガイナイ。ミハルハガクエンニイル」

大樹は次の手を打つために美春の父親にどこに行くかを聞くとなぜか美春の父親は美春の居場所を突き止めており、勢い良く、文月学園に向かい駆け出す。

「……かかわり合いたくないけど、行かないとダメだよな」

大樹は大きなため息を吐くと、美春の携帯に電話をかけて見るが、

「……つながらないか。あのバカ、後でお仕置きだな」

美春は大樹からの電話に出る事はなく、大樹はもう1度、ため息を吐くと、

「……せっかくの休日がこれかよ」

なんだかんだ言いながらも美春を助けに文月学園に向かい駆け出す。

第21問（後書き）

どうも、作者です。

ついに暴走した美春父。（爆笑）

大樹は抑える事ができるのか？

そして美春は？（爆笑）

第22問

「……ヒロのバカ。今更、謝ったって許しませんわ」

美春はFクラスの教室から出た後、とぼとぼ歩いて校庭のベンチに腰を下ろすと大樹から電話が着ている事に気づくが彼女も怒っているようで電話に出ない。

（美春はヒロに迷惑なんてかけてないです。だいたい、いつも、美春がお姉さまと2人の愛を確かめ合っている時に邪魔にくるのはヒロの方……あれ？）

「……」

美春は大樹とのケンカは自分は悪くないと言いたいようでそう思っている小さな男の子が美春の顔をのぞき込んでいる。

「えーと、ぼく、どこから来たの？ お名前は？」

「……前田 怜生です。今日はお兄ちゃんを待っています」

美春も大樹の両親との関係か、彼女にしては珍しく男の子に優しい表情で聞くと男の子は自分の名前を名のる。

「前田……あの豚野郎の弟？」

「ふえ！？」

「うー、ごめんなさい。お姉ちゃんは怖くないですよ」

美春は怜生の名字から、怜生と理音が兄弟だと察し、背後から殺意が溢れ出ると怜生は美春の様子に涙目になり、美春は慌てて笑顔を見せて、怜生を優しく抱きしめる。

「……お姉ちゃんはどうしたんですか？ 寂しそうです」

「美春がですか？」

「……はい」

美春がしばらく、怜生を抱きしめてしていると怜生は美春から何かを感じ取ったようで心配そうな表情で美春の顔を見上げる。

「何もないよ」

「……嘘です。お姉ちゃん、おかあさんと同じようにすごく寂しそうです」

美春は自分が大樹とケンカしてる事を怜生に言っても仕方ないとも思っているため、ごまかそうとするが、怜生は何かを思い出したように泣き出しそうな顔になって行く。

「怜生くん、泣かないで男の子だね。美春、実は幼なじみの男の子とケンカしちゃったの」

「……仲直りは？」

「してない。美春は意地っ張りですから」

美春は怜生に話しても仕方ないと思いながらも怜生に泣かれないように大樹とのケンカの事を話すと、

「……ケンカは良くないです。仲直りできなかったら、すごく寂しいです。おかあさん、泣いてました。お兄ちゃんと仲直りできなかった事、後悔してる。って」

「……怜生くん、おかあさんは？」

「……事故で死んじやいました」

「……」

怜生の言葉に美春は聞いてはいけない事を聞いてしまった罪悪感からか、怜生を抱きしめる。

第23問

「お姉ちゃん？」

「ごめんね。美春のせいでつらい事を思い出させちゃったね」

「……つらくないです。最初はおかあさんが死んじゃった時は悲しかったです。だけど、お兄ちゃんやお兄ちゃんのお友達、ヒロ先生と一緒に居てくれます」

怜生が心配そうに美春の顔を覗き込むと美春は怜生に謝るが怜生は笑顔を見せる。

「そうなんだ。怜生くんはあの豚……お兄ちゃんの事が好きなんだね」

「はい」

美春は怜生の頭を優しく撫でて言うと言うと怜生は大きく頷く。

「お兄ちゃんの用事が終わるまで、美春と遊んでみましょうか？」

「……仲直りは良いんですか？」

「うん。家に帰ったらすぐに謝ります。それに怜生くんみたいな子を1人にさせたって言うと言いと美春はヒロに怒られちゃうんです。美春が怒られないために美春と遊んで」

「はい」

美春も大樹の性格は理解しているため、怜生が断らないように言う
と怜生は頷いた時、

「ミハル、ミツケタ。ナンダ？ ソノオトコハ？ キサマ、ワタシ
ノマイエンジェルニナニヲシタ？」

すでに人ではなくなっている美春の父親に見つかる。

「……？」

「怜生くん、逃げますよ！？」

「鬼ごっこ？」

「はい。鬼はあのいかれた変態です」

怜生は美春の父親の登場に首を傾げていると、美春は全身の血が引
いて行くのを感じ、怜生の手を引っ張り、彼女の父親から逃げ出
すが、

「ミハル、マチナサイ。ソノオトコハナンダ？ ダレトノコダ？」

すでに人ではなくなっている父親からは怜生を連れて逃げ切れるわ
けがない。

「怜生くんは関係ないでしょ！！」

「お姉ちゃん、泣いてる？ ……おじさん、女の子を泣かせちゃ行
けないって、おかあさんもヒロ先生も言ってたよ」

美春はこのままでは勘違いしている父親に怜生が酷い目に合うと思い怜生を守るように抱きしめると怜生は美春の手から抜け出して彼女を守るように立った時、

「ちょっと!？ リオ、何やってるんだよ!! ここは3階!!」

「アキ、放せ。怜生に危険が……あいつだな」

「前田くん、花火は一般人に向けちゃだめです!？」

校舎の上からそんな声が響くとともに大量の花火が寸分の狂いもなく、美春の父親を撃ち抜いて行くが彼は止まらずに怜生と美春との距離を縮めて行く。

「ヒロ、助けて!!」

美春は怜生をもう1度、かばうように抱きしめるとこの場所にくるはずのない大樹に助けを求めた時、

「……おじさん、少し頭を冷やしてくれ」

大樹が現れ、美春の父親を池に向かい蹴り飛ばす。

第23問（後書き）

どうも、作者です。

美春の前に立ちふさがった父親。（爆笑）

偶然起きた理音と大樹の連携で父親を倒せたんでしょうか？

第24問

「……ヒロ？」

「電話くらいでろよな」

美春はくるはずのないと思っていた大樹の登場に呆けるが、大樹は当たり前のようにため息を吐く。

「……ヒロ先生」

「ん？ 怜生くん、前田を待ってるのかい？」

「……はい。おばあちゃんと一緒にいたんですけど、お客さんがきたので」

怜生は大樹にはそれなりに心を許しているのか美春から放れて大樹の足音に立つと大樹は怜生の頭を優しく撫でると、

「ヒロ、キサマ、ワタシヲウラギツタナ。ミハルニテヲダシタモノハコロス。コロシキル」

先ほど、大樹に池に蹴り飛ばされた美春の父親が大樹に飛びかかる。

「ヒロ!？」

「……おじさん、いい加減にしてくれよ」

美春は彼女の父親の行動に慌てて大樹の名前を呼ぶと大樹は予想は

していたようにため息を吐きながら、その攻撃を交わす。

「クロス。クロス。クロス。ワタシヲウラギリ、マイエンジェルヲ
カドワカセタツミ。シンデツグナエ」

「……あんまり、この手は使いたくなかったんですけどね」

話を聞く気のない美春の父親を見て、大樹はため息を吐くと、

「まあ、若干、情けないんですけど、時間は稼がせて貰いましたよ」

「清瀬、清水、無事か！……！」

生徒から通報があったようで、変質者（美春の父親）を押さえに文
月学園が誇る最強の類人猿西村教諭（鉄人）が現れる。

「キサマハダレダ。ワタシトマイエンジェルノジャマヲスルナ！！」

「……誰かは知りませんが、ここは学園の敷地内です。これで引い
ていただけないなら、実力行使に移らせて貰う」

美春の父親は西村教諭に敵意を向け、そこは人類が踏み入れてはい
けない戦闘が始まる。

「……鉄人は化け物だと思ってたけど、おじさんも変わらないな」

「……言わないで」

「……お兄ちゃん」

2人の対決を大樹、美春は表情をひきつらせて見ていると、怜生が理音を呼び、

「西村教諭、その親父は俺の獲物だ」

「待つんじゃない。前田！？ 鉄人と正面からやりあっている相手じゃぞ」

「そうだよ。化け物は化け物同士で潰し合いをさせておけば良いんだよ！！」

明久と秀吉を引きずった理音の他にFクラスの生徒全員がこの対決を見におりてくる。

「……大事になったな」

「……ヒロ、ごめんなさい」

「謝るなら、おじさんを止めろ」

「……それは美春には無理」

大樹と美春は顔を合わせて苦笑いを浮かべる。

第25問

「……清瀬、清水、あの男はお前達2人の関係者で間違いないんだな？」

「残念ながら」

「……」

大樹と美春は理音の毒物（瑞希の料理の味を再現した栄養剤）で小刻みに震えながらも「マイエンジェルミハル」と繰り返し返している人だったものを見ながら西村教諭が言う大樹はため息を吐く。

「詳しい話を聞かせてくれ」

「おじさんは重度を通り越して異常なほど美春が好きなんです。美春に近づく男はあの状態で追いかけてきます。後は、こいつは今、家出中で美春に会えない寂しさから見ての通り、暴走しました」

大樹は簡単に説明すると西村教諭は頭を押さえた後、

「……間違いなく、父娘だな」

美春を見てため息を吐く。

「ええ。出来れば似て欲しくなかったです」

「あんな変態と一緒にしないで欲しいのですわ」

大樹は苦笑いを浮かべるが、美春は不満げな表情で言う。

「……それで、この人はどうしたら良いんだ？」

「前田にさっき鎮静剤を貰ったんで試してみますか？」

「……あいつはどうしてそんなものを持ってるんだ？」

大樹は理音から貰った怪しげな薬瓶を取り出すと西村教諭はため息を吐く。

「いや、前に島田から頼まれたらしいんです」

「……父娘だな」

「そうですね」

大樹は理音が鎮静剤を持っていた理由を話すと2人の視線は美春に向けられ、2人でため息を吐く。

「まあ、少ししたら、発作も治まると思うんでしばらくしたら、解放してください。俺と美春は戦略的撤退をしますので」

「まあ、今、解放すると大事になりそうだしな……とでも言うと思っただか？」

大樹は西村教諭に美春の父親を押し付けようとするが、首をつかまれ、

「お前達2人は今日の騒ぎの罰として補習だ!!」

補習を言い渡される。

「……俺、被害者なんですけど」

「お姉さまと補習♪」

大樹は完全にとぼちりだのため息を吐くが美春は美波と一緒にだと思いい目を輝かせるが、

「来週の土曜日に高橋先生に頼んでおく。清水、言っておくがこれ以上、問題を起こすなら、それなりの罰があると思え。後、清瀬、清水の暴走を止めるのはお前の仕事のはずだ。しっかりとしろ」

「……西村先生まで、俺を保護者扱いなんですね」

西村教諭は美春を怒鳴りつけると大樹に言い、大樹はため息を吐く。

「それじゃあ、今日は帰っても良いぞ」

「……了解しました。行くぞ。美春」

「うん」

大樹は肩を落としながら歩き始めると美春は大樹の隣に並び歩き出し、

「……なんか疲れた」

「もう、元気出しなさいよ。そうだ。昨日、言ってた映画をこれか

ら観に行きましょう」

「……良いよ。面倒くさい」

「良いから行くの」

美春は大樹の手を取ると大樹を引っ張って行き、

「……まったく、清水は島田じゃなく、ちゃんと好きな男がいるじゃないか」

西村教諭は2人の背中を見てため息を吐くなか、

「ヒロ、ミハルニテヲダシタナ。コロス。ワタシカラムハルヲウバ
オウトスルオトコハヒロダロウガコロス」

西村教諭の後ろにいる美春の父親からは黒い殺意がはみ出ていた。

第25問（後書き）

どうも、作者です。

瑞希の料理の味は人外にも効く。（爆笑）

学園のなかではすでに大樹は美春の保護者。

近すぎてわからない距離は今回の件で美春の心に何かを残すんでし
ようか？（苦笑）

第26問

「……なんで、俺がお前に映画代を搾取されないといけないんだ？」

「細かい事を言わないの。せっかく、美春みたいなかawaii幼なじみがつきあってあげてるんだから、映画代くらいだしてもばちは当たらないわよ」

映画館につくと当然のように大樹の財布の中をあてにする美春に大樹はため息を吐くと美春は当然だと言う。

「……なんか納得がいかないんだよな。ん？」

「何かあった？」

「いや、あれって、Fクラスの坂本とAクラスの霧島だよな」

大樹はため息を吐きながらも美春の分の映画代とパンフレット代を支払うと大樹は映画館で手に木目模様の腕輪をつけた雄二と翔子の姿を見つける。

「坂本、霧島、デートか？」

「き、清瀬か？ た、助けてくれ」

大樹はまだ面識がある雄二に声をかけると雄二は大樹に助けを求める。

「助けてくれって、これからデートだろ。美人な幼なじみと恋人な

んてうらやましい限りだ」

「……明久達もそうだが、お前にはこの状況がデートに見えるのか？俺は捕まってるんだぞ」

大樹は幼なじみと両想いと言う状況にうらやましいと言う感情を抑えながら言う。雄二は自分の手につけられている枷を見せながら言う。

「お前がいつもテレて逃げるからだろ。なあ、霧島」

「……雄二が逃げないなら、外しても良い」

「本当か!？」

大樹は全面的に雄二が悪いと言う。翔子は、大樹の言葉に頷き、雄二は驚きの声をあげる。

「映画を観にきたんだろ。別に逃げる必要ないだろ。せっかく、金を払うんだ。逃げる事を考えるよりは建設的だ」

「そう言われれば、そうだな。翔子、映画なら付き合うから、これを外してくれ」

「……わかった」

大樹の言葉に雄二は少し冷静になったよう。翔子に言う。彼女は頷き、雄二から枷を外す。

「……自由って素晴らしいな。ん？　そういえば、清瀬、お前達も

デートか？」

「美春がヒロなんかとデートするわけないのです。変な事を言わないでください。この豚野郎！！」

「……雄二を悪く言うのは許さない」

雄二は自由になった手をぶらつかせながら、大樹と美春に言う。美春は雄二に罵声を浴びせ、その言葉に翔子が反応をする。

「……ムダなところで、敵を作るな。霧島、すまないな」

「……今回は清瀬に免じて許す」

大樹はため息を吐きながら、美春の頭を無理やり下げさせると翔子は頷く。

「こっちはデートじゃないらしいぞ。俺が観たいと言ってたら、美春がついてきただけだ」

「ん？ 何を観るんだ？」

大樹は簡単にこの状況を説明すると雄二は大樹と美春が何を観にきたのか聞く。

「これだ。今日までだって言うしな」

「面白いのか？」

「評判は良いらしいぞ」

大樹は買ったパンフレットを開くと雄二はパンフレットを覗き込み。

「翔子、俺達もこれにしようぜ」

「……雄二が良いなら、それにする」

雄二と翔子も同じ映画を観る事になる。

第27問

「評判通り良かったな」

「うん」

「……面白かった」

「そうか？ 俺としてはもう少しアクションシーンが派手でも良かったな」

映画が終わり、4人は体を伸ばしながらホールに移動する。

「さてと……帰るか？」

「ヒロ、ちょっと待って」

「ああ。行ってこい」

「……私も」

大樹は美春に帰るかと聞くと美春は先にトイレに行くといい、翔子も美春について行く。

「坂本、逃げるなよ」

「……清瀬、放してくれ」

翔子がいなくなったのを見て、雄二は逃げだそうとするが、大樹は

雄二の首をつかむ。

「あのなあ。時間だってあるんだ。女の子を1人で帰す気か？」

「翔子なら、大丈夫だ。だいたい、俺はあいつと付き合ってるわけじゃない。ただの幼なじみなんだ。そこまで世話する必要なんかねえ！！」

大樹は雄二の行動にため息を吐くが雄二は逃げようとする。

「……お前さ。本気で言ってるのか？」

「何がだよ？」

「口では簡単にいろいろ言えるけど、その言葉の意味ってわかってるか？ 言葉って簡単に人を傷つけるぞ。それがわかって言ってるなら、俺はお前を軽蔑する。前田や怜生くんから聞いていた坂本雄二って男とはだいぶ違うからな」

大樹は口調は淡々としているが、その言葉には怒気が含まれている。

「……ちっ。お前、厄介なヤツだな」

「良く言われる。それで、いつまで、自分の気持ちから逃げるつもりだ？」

雄二は大樹の言葉にため息を吐くと大樹は苦笑いを浮かべる。

「……さあな。俺にもわからんねえよ。どうしたら良いのかなんてな。あいつが俺の事を好きって言うのは俺があいつを傷つけたせい

で勘違いさせちまってるだけだしな」

「……勘違いねえ。知ってるか？ 幼なじみって言ったって、お互い人間なんだ。本当に嫌いな人間となんてつるめないぞ」

「……本当に厄介なヤツだな」

大樹はそれなりに雄二の気持ちがわかると言いたげに言う。雄二はため息を吐く。

「……何となく、境遇が似てるからな」

「……確かにな」

大樹と雄二は顔を合わせて苦笑いを浮かべると、

「……雄二、浮気は許さない」

「翔子、ちょっと待て！？」 俺は清瀬と話をしてただけだろ！！」

美春と翔子が戻ってくるなり、翔子の右手が雄二のこめかみをつかむ。

「……霧島、悪いが、俺にだって選ぶ権利がある。俺は坂本より、こいつが良い」

「!？」

大樹は翔子に雄二から手を放すように言う。その言葉に美春は今まで何度も大樹から言われていた言葉なはずなのに体温が上がって

くを感じる。

「……雄二、本当？」

「あ、当たり前だ」

「……それなら、信じる」

翔子は雄二の頭から手を放すと雄二の腕に抱きつくが、

「あだだだ！？ 翔子、関節技をかけるな！！」

それは関節技をかけているようにしか見えず、

「……霧島、それは違うから」

大樹はため息を吐くと翔子の手を雄二から放し、

「霧島、手を組むならこうだ。さっきのは間接技だから止めておけ」

「……わかった。次からは気をつける」

正しく手を組ませると翔子は素直に頷く。

「じゃあな。坂本、霧島、月曜な。美春、帰るぞ」

「う、うん」

大樹は美春と一緒に帰路につく。

第27問（後書き）

どうも、作者です。

大樹と雄二のマジ話。

どこか似てる2人だからこそその話ですね。

番外編でじゃなく本編で雄二と翔子を進展させろって意見もあると思いますが、本編に関わっていないところの話はありますからね。

（苦笑）

第28問

「……いるな」

「……いますわ」

大樹と美春は雄二と翔子の2人と別れて家に帰ろうとするが、大樹の家の前には美春の父親が背後から黒くまがましいものを垂れ流しながら、大樹と美春を待ち構えている。

「さてと、どうするかな？ どこかで時間を潰すとしてもたかが知れてるし……」

「どうかした？」

「メールだな……」

大樹と美春は美春の父親から見つからないように壁に隠れた時、マナーモードになったままの大樹の携帯電話がなり、大樹が受信メールを開くと、

「……これはない」

「……ですわね」

美春の父親から、画面いっぱい『殺す』と書かれているメールが49件送られてきている。

「さてと、どうするかな？ 今日は家に帰れないだろうしな。ダチ

のところでも泊まるかな。美春はどうする？」

「さすがに帰れないしね」

大樹は今日は家に帰る事を諦めると仲の良い友人にメールを送り始め、美春はため息を吐く。

「とりあえず、しばらくは歩くか？　ここにいろと見つかる可能性もあるしな」

「そうね」

大樹と美春が後ろを向いた時、

「……ヒロ、コロス。マイエンジェルニテヲダシタツミハシヲモツ
テツグナツテモラウ」

かつて美春の父親だったものが大樹と美春のすぐ後ろまで距離を測っている。

「お、おじさん？　いつのま……って、いきなり、ナイフを投げつけるな！？」

「コロス。コロス。コロス」

大樹は顔をひきつらせながら、かつて美春の父親だったものとコンタクトをとろうとするが今の彼に人の話を聞くと言う行為など存在するわけもなく、大樹に向かいナイフを投げつける。

「ヒロ、逃げるわよ」

「ミハル、ヒロヲカバウナシテ、コノキチクニナニヲサレタ。マツテテネ。マイエンジェル、イマ、コイツヲソンザイゴトケシサツテ。ミハルヲジユウニシテアゲルカラ」

美春は大樹と逃げようとするが、その一言がさらに美春の父親だったものの怒りに火を点ける。

「……無理、逃げられそうもない」

「でも」

「仕方ないだろ。いつかは通る道なら、早いうちにぶっ飛ばす」

大樹は背中を見せると殺られると判断すると真面目な表情をして、美春の父親だったものと向き合う。

「おじさん、俺も死にたくないんで本気で行きますよ」

「クロス、クロス、クロス」

美春の父親だったものは大樹の話に耳など傾けずに大樹の息の根を止めようと動いた時、

「ダメよ。ヒロくん、この場合は『お養父さん、娘さんをボクにください。』でしょ♪」

「お、お母さん？」

美春の母親が父親だったものをぶっとばす。

第28問（後書き）

どうも、作者です。

母は強し。（爆笑）

向き合った大樹しかし、邪魔が入る。

母親は空気を読んだのか？　ぶち壊したのか？

どっちでしょう？

第29問

「……おばさん、出るタイミングを見計らってましたね？」

「ヒロくん、そんなわけがないでしょ」

大樹は美春の母親の登場にジト目で見るが、彼女は笑ってごまかそうとする。

「ヒロ、クロス。クロス。クロス!!」

「ちょっと、あなたは黙ってなさい」

美春の父親は正気を取り戻しておらずに大樹にもう1度、襲いかかろうとするが、美春の母親は彼の首をつかむと、

「ヒロくん、うちの旦那が迷惑かけたわね。迷惑料は今晚、美春を好きにして良いから、あなたもバカやってないで行くわよ」

大樹に向かい問題発言を笑顔で言う。美春の父親を引きずって美春の家に入っていく。

「……おばさん、頼むから、おかしい事を言わないでくれ」

「……ホントよ」

大樹と美春は自分達が恐怖していた対象が難なく引きずられて行く様子を見てため息を吐く。

「とりあえず、おばさんも帰ってきたし、これで家に帰れるな」

「そうね」

ひとまずは美春の危機は去ったと思い2人で美春の家の前に移動するが、

「……」

「どうしたんだ？」

美春は家のドアを開けるが家に入って行かず、大樹が首を傾げると、

「……チェーンがかかてる」

美春の母親は本当に美春を今日も大樹の家に泊めるつもりのように、美春を締め出している。

「……まったく、ひとまず、うちに行くか。おばさんの事だ。美春の部屋も鍵がかけられてるだろうが、確認はしないとな」

「そうね」

大樹はため息を吐くと、美春と一緒に自分の家に戻る。

「ただいま」

「……おい。ここは俺ちだ。お邪魔しますだろ」

「ヒロ、細かい」

美春は昨日と同じように居間にあがるとテレビの前を陣取り、大樹はため息を吐くが彼女は気にする事はなく、

「制服で寝転がるな。シワになる」

「うるさいなあ」

大樹はため息を吐きながら、美春に着替えるように言う。彼女は文句を言いながらも着替えるために部屋に上がって行く。

「まったく、とりあえずは飯の準備か？ ……おじさんのせいで汗かいたし、飯前に風呂だな」

大樹は美春の背中を見送った後、風呂の準備をしに行く。

第30問

「……ヒロ、まだ起きてる？」

風呂に入り、夕飯を食べ終えて大樹が部屋に戻り、ベッドに横になっていると美春が部屋をノックした後、ドアを少し開けて大樹の部屋を覗く。

「何かようか？」

「起きてた？」

「ああ。どうかしたのか？ 最初に言っておくけど、おじさんには家にいるのはバレてるんだ。だから、逃げ場は限られてると言うかヘタしたら、窓からくるからな。ここにいない方が良いだら」

「さすがに鍵もかかってるし、無いでしょ」

大樹は起き上がり、ベッドに座りながら彼女の父親の襲撃を警戒しろと言うと美春はため息を吐きながら、大樹の隣に腰掛ける。

「……いや、おじさんなら、窓をぶち破ってでも美春を取り戻しにきそうだ」

「……止めて。本当にきそうだから」

大樹は美春の父親の盲目的な様子を思い浮かべて、ため息を吐くと美春は顔をひきつらせる。

「それで、何かようか？」

「うんとね。今朝の事を謝ろうと思って」

大樹は美春に何をしにきたかと聞くと美春は少し照れくさそうに言うが、

「……何が目的だ？」

大樹は美春の言葉を疑い怪訝そうな表情をする。

「何よ。それ？　せっかく、美春が謝りに来たのに」

「文句があるなら、少しは俺の言う事を聞け」

美春は頬を膨らませるが、大樹はため息を吐く。

「……わかってる。反省してる」

「……何だ？　ずいぶん今日は謙虚だな」

「怜生くんに怒られちゃったからね。ケンカしたら謝らないと行けないんだって」

美春は昼間に怜生から言われた言葉に反省しているようで苦笑いを浮かべる。

「そうか……」

「ごめんね。ヒロ、いつも迷惑かけて」

「別になれてるから、気にするな」

美春は今まで大樹に謝る事はなかったため、恥ずかしいのか目を伏せると大樹は優しい表情をして彼女の頭を優しく撫でる。

「……ねえ。ヒロ」

「何だ？」

「どうして、ヒロはあれだけ文句を良いながら美春を助けてくれるの？」

美春は顔を赤く染めながら、大樹の顔を見上げて聞く。

「あ？ えーと、今更の事を改めて聞く気か？」

「……うん。聞かせて。お願い」

大樹は今までとは違う美春の反応に照れくさそうに首の後ろを掻き彼女に聞き返すと美春は大樹から視線を逸らさずに言う。

第31問

「……まあ。美春が好きだからだ。お前は幼なじみで家族みたいなものかしら思っていないだろうけどな。俺は家族じゃなく、1人の女の子として美春が好きだよ」

「……そうなんだ」

大樹は今までの軽いノリではなく、照れくさそうに言う和美春も改めて聞く、大樹の言葉に顔を赤くして大樹から視線を逸らす。

「……ねえ。ヒロ」

「……何だ？」

「……美春から聞いたと言うのも何ですけど、答えてすぐじゃないとダメ？」

美春は大樹の気持ちは嬉しいが大樹からの真剣な告白にどう答えて良いのか迷っているかわからないようである。

「できれば早めが良いな。俺はいつまでも待ってられるほど、気は長くない」

「そうだよね……ヒロ、美春はヒロの事が好きだよ。ずっとそばにいて欲しい。たぶん、1人の男の子として……」

「ああ……」

美春は彼女にしては珍しく言葉を選びながら大樹が好きだと言うが、大樹は彼女と付き合いが長いため、美春の言葉にはまだ続きがあると理解している。

「ヒロの事は好き……でも、お姉様の事をヒロと同じくらい好き」

「島田と一緒にか」

美春は大樹に美波と同じくらい好きだと言うと大樹は苦笑いを浮かべる。

「だから、まだ、ヒロとは付き合えないよ」

「卑怯だな」

「うん。わかってる……」

美春は美波への想いを諦めきれないと言うと大樹は苦笑いを浮かべ、美春は申し訳なさそうに頷く。

「まあ、それでも、1歩先に進んだんだ。今日はこれで良いか」

「……本当？」

「……ああ。別に今までだって上手くやってきたんだ。これからだつて上手くやる。だけだな……」

「……っ!？」

大樹は美春の頭を優しく撫でると美春は大樹の答えを聞き、顔を上げた時、大樹は無防備な彼女の唇を奪う。

「ヒ、ヒロ!？」

「まあ、我慢させるんだ。少しくらいは俺にも餌をくれ」

美春は大樹のいきなりの行動に目を白黒させると大樹はイタズラな笑みを浮かべ、

「ほら、用が終わったなら、戻れ。俺も男だから、今の状況で隣にいられると理性が保ってなくなる」

美春に言うと、

「ヒロのスケベ!!」

美春は大樹の頬を思いっきり、ひっぱたき、大樹の部屋を出て行く。

「……からかい過ぎたか？」

大樹は美春にひっぱたかれた頬を押さえながらも美春の素直な気持ちに顔の筋肉はゆるんでいる。

第31問（後書き）

どうも、作者です。

美春正統派ヒロイン計画は皆さんの目にどう映ったでしょう？

ヒロインに見えた？らしくない？

まあ、気にしないで行きましょう。

次は最終問題だったりします。

大樹と美春の関係はどうなって行くんでしょうか？

最終問題

「……なあ、美春。今日は一応はデートじゃなかったのか？」

「ヒロ、黙りなさい。今すぐあの豚野郎を美春の手で八つ裂きにしないといけないの」

「やれやれ」

大樹の告白から1週間が経ち、今までとは違う形での買い物をするはずだったのだが、美春が美波と一緒にいる明久を見つけたため、美春は全力で2人を追いかけ始め、大樹はため息を吐きながら美春を追いかけている。

「せっかく、おじさんを振り切ったのにこれかよ」

「ヒロ、遊んでるヒマはありませんわ！！ このままだとお姉さまがお姉さまが」

大樹は美春と出かけるときに彼女の父親と揉めたようで時間をムダにしたくないと言うが美春の目には美波と明久しか映っていない。

「ん？ 清瀬に倒錯娘1？ 何をしてるんだ？」

「前田か？ 美春に聞いてくれ」

理音と怜生が買い物にしていたようで2人を見つけて声をかけると大樹はため息を吐く。

「あなた、お姉さまと豚野郎を見ませんでしたか？」

「アキと島田か？ 探してるなら、ウチにくるか？ 今日は怜生の誕生日であいつらもくるんだ」

「そうだったね。おめでとう。怜生くん」

「ありがとうございます。ヒロ先生」

美春は理音につかみかかるように聞くと理音は彼女の手を払いながら怜生の誕生日だと言うと大樹は怜生におめでとうと言う。

「ヒロ先生もお姉ちゃんも仲直りできたみたいで良かったです」

「うん。怜生くんのおかげだよ」

怜生は大樹と美春が2人で見ているのを見て、素直に言うとは美春は怜生の純粹さに黒い殺意が浄化されたようで笑顔で怜生にお礼を言うと、

「どうする？ くるか？」

「遠慮します。怜生くんのお誕生日を祝えないのは残念ですが、美春が行くと大変な事になりますから」

理音が美春に聞くと美春は自分が暴走して怜生の誕生日を壊してしまわないように気を使い、

「怜生くん、今日は美春はヒロとお出かけする約束があるので残念ですけど」

「はい。お姉ちゃんはヒロ先生と一緒にいるのが良いと思います」

怜生に謝ると怜生は笑顔で言う。

「そうか。怜生、帰るぞ。清瀬、倒錯娘、またな」

「さようなら」

理音は怜生の手を握り、2人に背を向けて歩き出す。

「ヒロ、買い物するもの。増えたね」

「ああ。怜生くんの誕生日プレゼントも買わないとな」

美春は大樹の手に抱きついて言う。大樹は頷き、2人で歩き出す。

その姿は以前の幼なじみと言う姿とは少しだけ違っていた。

最終問題（後書き）

完結までお付き合いいただきありがとうございました。

美春ヒロイン化計画は皆さんの目にはどう映ったでしょう？

無謀？ それとも……

個人的にバカテスの二次創作は優子がヒロインの多いので新境地を開拓させていただきました。

これで美春ヒロインの小説が出てきたら楽しみが増えるかな？ と思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4762o/>

恋と理性と幼なじみ

2011年10月7日15時15分発行